

戦中・戦後の駒澤大学と「揭示録」

—「戦中・戦後の駒澤大学～揭示板から見る大学の姿～」の開催によせて—

中村 亮佑

はじめに

本稿は駒澤大学禅文化歴史博物館2階の大学史展示室において、平成27年(2015)11月9日(月)から本年3月31日まで実施された、大学史展示室特集展14「戦中・戦後の駒澤大学～揭示板から見る大学の姿～」(以下「本学特集展」と略記する)について、開催に至るまでの経緯や展示の内容について紹介するものである。また、筆者が展示を実施する上で行なった、資料調査の報告を兼ねている。

平成27年は終戦から70年の節目である。そのため、全国大学史資料協議会東日本支部会が主催となって明治大学博物館で「第2回全国大学史展 学生たちの戦前・戦後・戦中」(平成27年7月3日(金)～8月2日(以下「第2回全国大学史展」と略記する)が開催された。これを一つの契機として、他の大学でも戦争に関する展示が行なわれるようになった¹⁾。

「第2回全国大学史展」は、第一次世界大戦後の高等教育機関の拡充期から、第二次世界大戦および戦後の大学改革を経て高度経済成長期までの大学生に主眼をおいた展示となっており、各時期の学生たちがいかに学校生活を過ごしていたかを資料に基づいて振り返り、今の大学や大学生の在り方を見つめなおすきっかけを提供している。全国大学史資料協議会東日本支部に所属する大学・機関が所蔵する、学生ノートや教材、写真が約300点集められ開催された。

駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室(以下、「大学史資料室」と略記する)も「第2回全国大学史展」に、禅文化歴史博物館所蔵の「揭示録」から3点出展している。本学特集展は、「第2回全国大学史展」に出展した史料3点も含め、他の「揭示録」の史料も多くの来館者の目に触れてもらいたいと思い、開催した次第である。

本稿の構成は、まず一章で展示に至るまでの経緯とその内容、他大学の戦争関連展示の動向を簡単にまとめている。二章では、展示の中心として活用した「揭示録」を使って、その史料性格や、昭和18年(1943)から昭和23年(1948)の駒澤大学の動向を検討している。

1、展示に至る経緯と内容

(1) 他大学における戦争関連展示

本学特集展を開催した平成27年は、終戦からちょうど70年の節目に当たる。これに先立って学徒出陣は平成25年(2013)に70年目を迎えたため、この頃から少しずつ戦争を扱った展示が開催されていた。

例を挙げると枚挙に暇がないが、いくつかの先行展示を紹介させていただく。

①早稲田大学

早稲田大学大学史資料センターは、平成24年度以降、毎年一回の戦争関連展示を行なっている(平成24年度春季企画展「戦地に逝ったワセダのヒーロー松井栄造の24年」、平成25年度春季企画展「ペンから剣へ—学徒出陣70年—」、平成26年度秋季企画展「十五年戦争と早稲田」、平成27年度春季企画展「戦後七〇年 学徒たちの戦場」)。

また、平成25年度から聞き取り調査を継続して行っており²⁾、平成27年度には講演会「学徒出陣を語り継ぐ 学生を二度と学苑から戦場に送らない」も開催しているなど、積極的に研究成果の報告を行なっている。

②慶應義塾大学

福澤研究センターでは、平成25年度から「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトを行なっている。その成果として、平成25年度展示「慶應義塾の昭和十八年」、平成26年度展示「残されたモノ、ことば、人々」、平成27年度展示「慶應義塾と昭和二十年」、特別企画展「戦争の時代と大学」を開催している³⁾。

③法政大学

法政大学史センターでは、平成24年度から6年計画で全学的に学徒出陣者等への聞き取り調査を行なっており、平成25年度にシンポジウム「学び舎から戦場へ—学徒出陣70年 法政大学の取り組み—」を開催し、本年は法政大学学徒出陣調査中間報告会「戦後70年 法政大学と学徒出陣—記憶と記録」を開催している⁴⁾。

④中央大学

学部長会議のもとに設けたワーキンググループによって運営される「戦争と中央大学プロジェクト」を立ち上げ、平成27年度に戦後70年記念講演会「戦中・戦後の中央大学」、戦後70年記念シンポジウム、展示「戦後70年—あらためて戦争と中央大学を考える—」を開催している⁵⁾。

⑤明治大学

明治大学歴史編纂事務室(平成15年(2003)、大学史資料センター事務室に移管)では、平成11年度に明治大学小史展「ある戦没学徒の生涯」を開催し、平成18年度には明治大学史資料センターが企画展「明大生と学徒兵」を開催し、平成20年度には総務部企画総務課・大学史資料センターグループ主幹で明治大学小史展「昭和戦前の学園」を開催している。

また、明治大学戦没学徒兵調査研究会が平成20年(2008)から平成21年(2009)にかけて調査を行ない、研究の集大成として『戦争と明治大学』を刊行している⁶⁾。

⑥日本大学

日本大学広報部大学史編纂課では、平成26年(2014)7月から1年間をかけて、昭和12年度~20年度の在校生を対象として、学徒出征数の調査を行なっている。学部の学籍簿や授業料台帳などをもとに調査を行ない、成果がまとめられている⁷⁾。

⑦立教大学

平成12年度に発足した立教学院史資料センターは、翌年から研究プロジェクト第1号「立教学院と戦争に関する基礎的研究」を開始し、多くの研究成果を『立教学院史研究』に残している⁸⁾。

また、平成14年度から3年間「国際環境の中のミッションスクールと戦争—立教大学を中心に—」という研究課題で、科学研究費の助成を受け、平成17年度に報告書を刊行している⁹⁾。平成27年度には、立教学院展示館が第1回企画展「戦時下、立教の日々—変わりゆく「自由の学府」の中で—」を開催している。

今回挙げた以外にも展示やシンポジウム等は行なわれているが、紙幅の関係上割愛させていただく。各大学はプロジェクトや研究会を立ち上げるなどして資料調査を行ない、その調査成果を展示、紀要への執筆、シンポジウムなどで大学史教育に還元している。

本学の大学史資料室においては、すでに紹介した各大学のようなプロジェクトや研究会、継続しての資料調査は行なわれていない。そのため、本学での展示開催を行なうためには、新たに所蔵資料の調査を行う必要があった。

(2) 駒澤大学における戦争関連展示

次に本学の大学史資料室で、過去に行なわれた戦争関連の展示を確認してみよう。大学史資料室では戦争に関する展示を、平成16年(2004)と平成18年(2006)の2回行っている。

平成16年の展示は、「駒大ゆかりの作家たち1—司馬遼太郎と駒大同窓生の出会い—」というタイトルで行なっている。

本学予科3年であった熊谷能忍氏と司馬遼太郎が、学徒出陣で配属された満洲の地で出会い、戦後にラジオ放送がきっかけとなって再会するまでのストーリーを描いている。

平成18年の展示は、「戦争と大学」というタイトルで、軍需工場への「学徒動員」や「学徒出陣」など、学生の動向に着目して展示を行なっている。また、卒業生から寄贈されたゲートルや銃剣道用手袋、日章旗などを展示していた。

以上の本学での先行展示は、文学作品との関連や学生の動向から内容を組み立てていた。そして、この2つの展示に共通して使用されている史料が、「第2回全国大学史展」に出品した「揭示録」なのである。

「揭示録」は『駒澤大学百二十年史ビジュアル版』・『同通史編』（以下、『百二十年史』と略記する）に掲載されていることから、開校百二十年史編纂委員会・同編纂室が発足した平成11年（1999）から平成14年（2002）年の間、編纂の過程で確認されたと推測される¹⁰⁾。その後、平成15年に禅文化歴史博物館大学史資料室に移管されるに伴い、「揭示録」やその他の史料も移管された。

百二十年史の編纂過程で使用された「揭示録」は、その後平成16年・18年の展示に使用されて以降、収蔵庫に保管されたままとなっていた。しかし、平成27年になって、「第2回全国大学史展」に出品され、再び人目に触れる機会を得たのである。

そこで筆者は、この機会に駒澤大学の学生や教職員・一般の来館者の多くに見てもらいたいと思い、「揭示録」をメインに据えた展示を構想した。戦中・戦後の時期に、当時の学生や教職員が実際に目で見えていた史料を、70年の時を超えて現在の学生や教職員にも見てもらいたいと考えたのである。

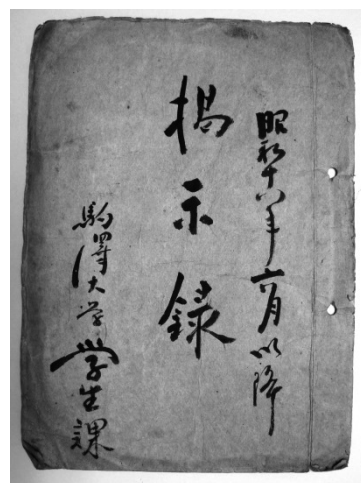
（3）「揭示録」について

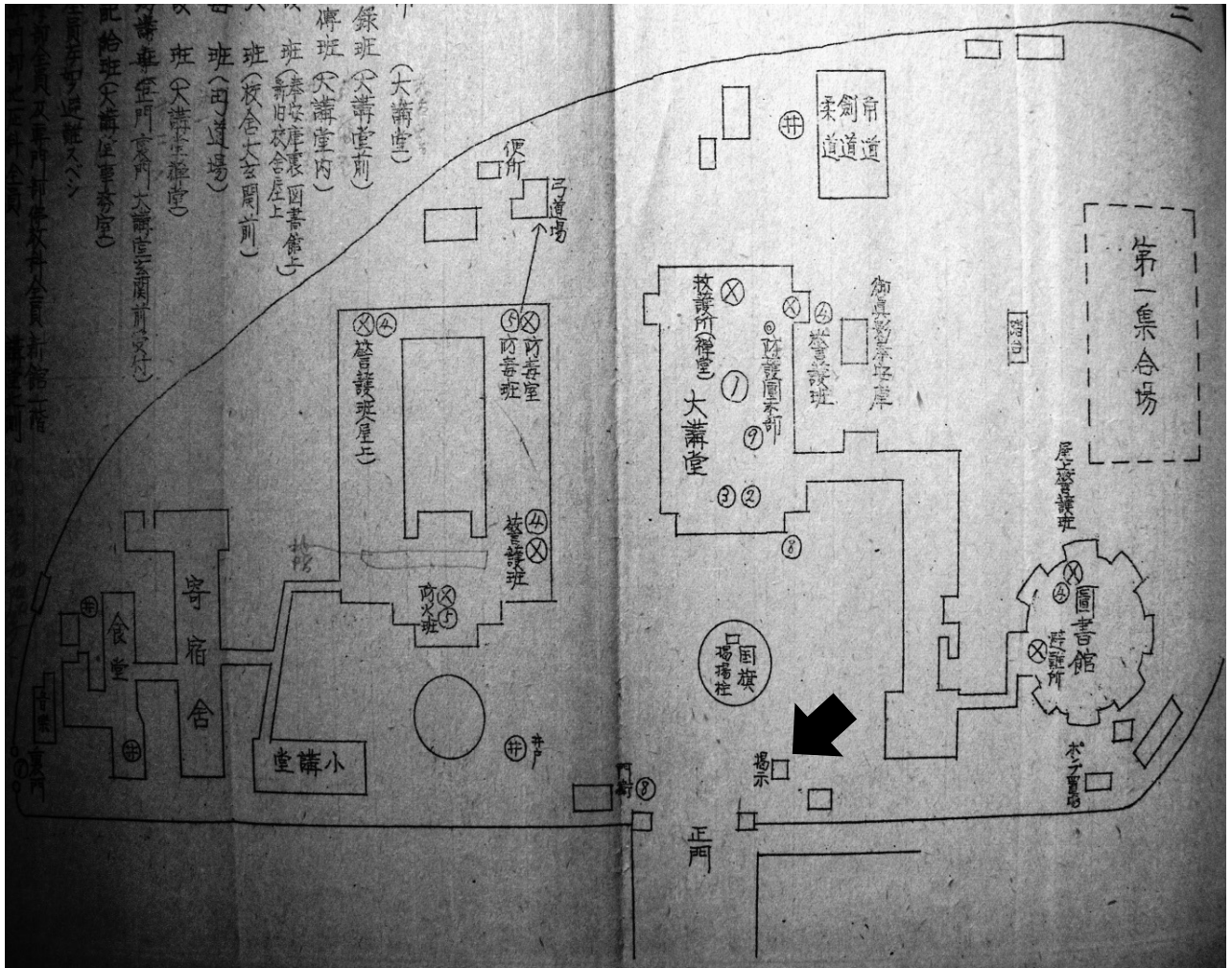
今回の本学特集展のメインである「揭示録」とは、揭示板に貼られていた揭示物を、おおよそ編年順に並べ替えて綴った史料である。史料の年代は、昭和18年から昭和23年まで、全279件である。なお、「揭示録」に綴られていた一点一点の揭示物について、本稿では「揭示史料」と呼称する。

「揭示史料」は、大半が赤い線の罫紙に書かれている。大半は上方の隅二箇所に画鋏で留めた跡がある。表紙には厚紙を用いており、「昭和十八年六月以降 揭示録 駒澤大学学生課」と記載されている。このことから、揭示物の管理は学生課が行なっていたことがわかる。

また、同様の赤い罫紙にかかれており、本来は「揭示録」に所収されるべき史料が、内容の関係から「揭示録」以外の史料群として綴られている簿冊も確認できる。例えば、報国団の編成に関わる「揭示史料」は、「揭示録」の他に「報国団関係綴」と記載された簿冊に綴られている。つまり、「揭示史料」は「揭示録」のみに確認できるわけではないのである。

最後に揭示板の設置場所であるが、昭和17年（1947）ごろの構内見取り図によると、当時の正門を入れて右側（現在の禅研究館の手前）に設置されていたことが確認できる（次頁、写真の矢印の所¹¹⁾。





(4) 展示開催までの経緯

史料調査を行う上で「揭示録」の細目録をとることから始めた。先述の通り、「揭示録」は掲示板に貼られた揭示物を一冊に綴った史料であり、一点一点の内容は異なっている。そのため、それぞれの内容を把握しなければならなかった。「揭示録」の史料を内容ごとに分けた279件の細目録は、紙幅の関係上本稿に載せることが叶わなかったため、大学史資料室HPにて掲載させていただく。

「揭示史料」を把握した後は、展示内容を組み立てた。他大学の戦争関連展示では、学徒出陣など戦時下の学生の動向を題材とした展示が多かった。そこで、他大学の先行展示と差別化を図るべく、本学の大学史展示は「揭示録」を中心に据えて、大学の動向を表現したいと考えた。

この「揭示史料」は、学生だけが見ていたわけではない。中には教職員に宛てられたものも存在しているから、教職員も目にしていたのである。また、揭示物は「庶務課」「学生課」や学長が発給しているため、当該期の大学運営方針をうかがい知ることができる。そのため、展示の副題にあるように「大学の姿」と大きく視野を広げることにし、学生や教職員の動向を展示で表現することにした。また、戦時中のみではなく、戦後の日本の混乱期に、学生や大学がどのようにして活動していたのかにも光を当てることにした。特に新制大学移行に至るまでの、大学の動きに重点を置くことで、これまでの本学の先行展示とは差別化を図った。

最後に、具体的な展示の配置を検討した。戦中・戦後の各時代は、終戦を境に分けたほうが良いと考え、入って左側の展示ケースを戦中、右側の展示ケースを戦後に配置した。正面には写真パネルや「揭示録」の史料が掲載されていた掲示板の位置（現在の禪研究館より手前側）をパネルにして示し、「揭示録」の全容を知っていただく目的として、「揭示録」自体も展示した。

「揭示録」は一冊の綴りであるが、ほとんどの史料が一枚ずつの罫紙であるため、展示台に置いてしまうと平面的になってしまい、展示全体の立体感が無くなってしまいます。そこで、展示ケース内の壁に「揭示録」の史料を展示することにした。「揭示史料」はもともと揭示板に掲載されていた資料であるから、この展示方法によって戦中・戦後当時に揭示板に貼られていた様子を再現している。

一方で、展示台には立体感のある史料の展示を試みた。左側(戦中)の展示ケースには、平成18年の大学史展示で使用した銃剣道用手袋や戦闘帽、新たに寄贈された卒業アルバム(昭和16年)など立体感のある史料を展示した。右側(戦後)の展示ケースには、従軍証明書や東京都知事からの感謝状を展示した。こちらは、戦後の所蔵資料が少なく、平面的な展示となってしまったため、今後の展示に備えて、戦後駒澤大学に関する史料収集が必要であろう。

2、「揭示録」の内容

次に「揭示録」の内容について確認してみる。なお、以下の掲載史料に付されている番号は、大学史資料室HPにて掲載した細目録の番号と一致する。

(1)「告」と「謹告」の違い

「揭示史料」の大半には「告」もしくは「謹告」の表題が付されている。これらはどのように使い分けられているのかを検討する。

【史料1】(No.279)

告

十月廿六日(火)午後二時本学講堂に於て講演会を開催す

記

一、講師 京都大学講師 源豊宗先生

二、演題 日本美術の諸問題

以上

昭和廿三年十月廿三日 駒澤大学

【史料2】(No.278)

謹告

十月廿六日(火)午後二時左記の通り講演会を開催致します

記

一、講師 京都大学講師 源豊宗先生

二、演題 日本美術の諸問題

以上

昭和廿三年十月廿三日 駒澤大学

【史料1】、【史料2】共に「揭示録」の中では一番新しい史料である。どちらも源豊宗氏による講演会開催の告知を行なっている。源豊宗氏は日本仏教美術史の研究者であり、曹洞宗大学の出身者でもある。京都大学講師の後、関西学院大学教授、帝塚山学院大学教授などを歴任した人物である。

伝えている事柄は同じであるが、「告」から始まる【史料1】は「本学講堂に於て講演会を開催す」と決定事項を通告しているのに対して、「謹告」から始まる【史料2】は「左記の通り講演会を開催致します」と丁寧な口調になっている。根本的な内容は同じだが、文言に若干の差異が認められる。これはなぜだろうか、他の事例を見てみよう。

【史料3】(No.119)

告

八月一日(水)七時十分ヨリ、大講堂ニ於テ祝聖ヲ嚴修ス、学徒一同必ず出席スベシ

七月三十一日

【史料4】(No.118)

謹告

八月一日(水)七時十分ヨリ、大講堂ニ於テ祝聖ヲ嚴修可仕候間、御参列相成度此段及謹告候

七月三十一日

教授講師各位

【史料3】、【史料4】は、先ほど挙げた史料と同様、2点とも同じ内容が書かれている。それにもかかわらず、「告」と「謹告」の二種類が存在する。

まず、両史料の文言を確認してみる。【資料3】の「告」では「大講堂ニ於テ祝聖ヲ嚴修ス」とある。これに対し、【史料4】の「謹告」では「大講堂ニ於テ祝聖ヲ嚴修可仕候間」とある。また、【史料3】「学徒一同必ず出席スベシ」に対し、【史料4】「御参列相成度此段及謹告候」とあり、ここでも、若干の文言の差異を確認できる。

次に、宛先に注目してみたい。史料3の「告」では宛先は記載されていないが、「学徒一同」に出席を命令しているものであるから、学生に向けられた掲示であることがわかる。これに対して、【史料4】の「謹告」では宛先が「教授講師各位」となっている。したがって、「告」は学生向け、「謹告」は教職員向けと考えられそうである。

「掲示史料」279点すべてを確認してみると、「謹告」が67点存在している。そのうちの約半数は「教授講師各位」「諸先生各位」「諸老師各位」「教職員各位」などが宛先として記載されている。

以上のことから、「告」は学生向け、「謹告」は教職員向けの掲示であることがわかる。また、学生向け・教職員向けの同内容の掲示物を、同じ掲示板に掲載するとは考えにくいいため、教職員用の掲示板が別の場所に設置されていたと推測することができよう。

(2) 掲示史料の傾向と概要

「掲示史料」の発給年月日とその傾向について確認してみたい。次の表に、各年・各月の発給点数をまとめてある。

■各月の掲示数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	不明	計
18年	0	0	0	1	15	19	11	3	4	0	2	4	6	65
19年	2	3	2	7	3	1	0	0	4	0	0	4	1	27
20年	5	0	0	0	1	6	6	1	2	3	3	8	2	37
21年	1	7	2	1	10	1	0	0	5	12	10	4	0	53
22年	4	2	0	2	7	4	0	0	7	14	3	7	2	52
23年	6	2	1	7	10	6	0	0	4	6	0	0	3	45

※年次比定は、内容や前後の掲示史料からの推定も含む

「掲示史料」は、年月日が判明もしくは推測しうるものでは、昭和18年4月19日が初見であり、終見は昭和23年10月23日である。このうち、発給が最も多い年は昭和18年で、月ごとで見ると5月が最も多い。一方、7・8月には極端に少なくなるが、これは長期夏季休暇に入り、帰省する学生が多くなるからであろう。また、昭和19年の10・11月に史料が確認できないが、これは後に述べる「古河鑄造株式会社」への勤労奉仕と関連しているであろう。

次に、各年の発給数とその年(年度ではなく年単位)の大学の大きな出来事を「掲示史料」をもとに記す。

○昭和18年

昭和18年は、65点の「掲示史料」が確認できる。勤労奉仕(No.12等)や体錬大会の実施(No.29等)・各訓練部の体格検査(3、

11等)など、戦時色の強い内容が多く確認できる。また、それに伴う学部生への集合命令・命令違反者に対する罰則処分も多く確認でき、教授の勤労奉仕監督等による休講も多くなっていたようである (No31)。

一方では万年筆の落し物に関する揭示 (No30) や、求人・研究生の募集 (No25、26等)、試験中の注意事項 (No52)、人文学研究会の懇談会 (No42) など、今と変わらない学校生活の姿も見ることが出来る。

○昭和19年

昭和19年は、27点の「揭示史料」が確認できる。この時期は、耐寒訓練 (No65、66)・消防訓練 (No68、70、73)・勤労奉仕 (No71、78等)・身体検査など、戦争関連の揭示が多く確認できる。一方では、下駄箱の配置 (No75)・吟詠部の稽古に関する揭示 (No82) など、数は減少するが大学生活をうかがわせる揭示も存在している。勤労奉仕や学徒出陣のため、学生数が減少したのか、最も点数が少ない時期である。

○昭和20年

昭和20年は、37点の「揭示史料」が確認できる。この時期は、終戦前後で史料の内容・数量が大きく変化している。1月には、学部生全員に対して勤労働員指示が行なわれており、学生全体 (予科は不明) が工場に駆り出されていた (No97)。2・3・4月には史料が無いが、これは学生が大学内にほとんど残っていなかったためであろう。5月には国防のために献金を行ない (No99)、6月21日には学徒隊が結成される (No116)。さらに、7月には、駒澤大学戦闘戦隊が編成され、駒澤大学における戦闘態勢が整えられていった (No103)。

終戦を迎え、9月から二学期が始まり、それまで軍需工場等に送られていた学生が大学に戻ってくるようになると、戦争中の軍事色の濃い学生心得が改められ、戦前に還元された (No106)。その概要を見てみると、①髪は五分刈り以下、②校内の土足厳禁と下履きの各自保管、③和服着用の許可制、④喫煙の禁止、⑤挙手ではなく脱帽低頭での敬礼である。それぞれ、戦争中に緩んだ心得の引き締めや、戦前への回帰が目的であった。また、同月13日には、遅刻・欠席等の取り扱い規定が揭示されていることから、授業が再開したことが想定される (No105)。これによると、授業開始後40分経過で欠席扱いとなり、遅刻2回で欠席1回とカウントされ、時数の4分の1を欠席すると、学期末の受験資格を失うとある。11月1日には校友会が発足し、各部の部長が任命されるなど、大学生活が戦前の状態に戻りつつあることが分かる (No108~110)。

12月10日には、山上曹源が学長を辞任し名誉教授立花俊道が就任し (No125)、18日には学監の西澤頼応が辞任し石附賢道が就任した (No129)。これにより、戦中から継続されていた大学の運営体制が大きく転換された。山上曹源が辞任した12月10日は、冬季休業の開始日であった (No126、127)。終戦後も継続して山上曹源が学長を務めたが、戦後の混乱の中では解決策を見出すことが出来なかったのであろう。このような「時局ノ推移ニ鑑ミ」(No125)、学長経験者ですでに教壇を退いていた立花俊道名誉教授を招聘して、戦後駒澤大学の未来を託したのでであろう。終戦後から12月までの山上体制は、戦後処理と後任人事の決定を待つ、いわば「中継ぎ」のようなものであったと評価できよう。

○昭和21年

昭和21年は53点の「揭示史料」が確認できる。前年12月に学長・学監が交代し、第二次立花俊道体制が成立した。立花俊道は、昭和8年(1933)3月から学監を務め、昭和12年(1937)5月~同16年6月まで学長に就任している。

前年からすでに、出征・動員されていた学生が帰校し始めており、講義の復活や学級編成、校舎の復興など、戦後大学運営を迅速に進める必要があった。しかし、戦後の混乱期において、大学運営は思うようには進んでいなかったようである。

当初、前年12月10日から翌1月19日までを冬期休業とし、21日に3学期始業式・授業開始を予定していたが (No127)、「諸般ノ事情ニ鑑ミ冬季休暇ヲ更ニ二月拾日迄延期ス」ることを決定した (No130)。始業式は2月11日に行なわれることになった。山上曹源の学長辞任と立花俊道の学長就任は前年12月10日、つまり冬期休暇開始日であることから、立花俊道は2月11日になってようやく就任の挨拶をすることができたのである (No128)。

3学期の始業と同日に、学部・予科・専門部の教室割が発表された (No137)。その内訳をみると、学部の仏教学科 (16

番教室)・東洋学科(17番教室)・人文学科(18番教室)、予科の第一学年(13番教室)・第二学年(10番教室)、専門部の仏教科一年(23番教室)・仏教科二年(24番教室)・国語科一年(22番教室)・国語科二年(19番教室)・歴史地理科一年(20番教室)・歴史地理科二年(21番教室)、となっている。使用していない教室の使用方法は不明であるが、『駒澤大学八十年史』(以下、『八十年史』と略記する)では、「昭和二十一年度の開講時には学生数は千人を超えるほどになった」とあるから、すでに昭和20年度の3学期から、相当数の学生が復帰していたことが伺える¹²⁾。

3学期の期間は短く、3月17日から4月30日まで「春季休暇」となり、昭和21年度の1学期が5月1日に行なわれることとなった(No139)。学則によれば4月1日から翌3月31日までを一学年とし、春季休暇は4月1日から7日までとされていたようであるから¹³⁾、今回の1ヶ月半もの春季休暇は戦後の状況に応じて定められたのであろう。学生募集も行なっていたようで、5月3日には予科と地理歴史科の補欠募集を行なっている(No143、144)。新入生が入学したことで各学年が揃い、各級主任教員・学級委員も任命されて、教育体制が整備されたのである(No145、146、147)。

10月になると、竹原常太編『スタンダード和英辞典』・『スタンダード英和辞典』(大修館)が各20部ずつ本学に割り当てられ、定価83円で販売された(No165)。次いで11月には斎藤静編『双解英和辞典』(富山房)が定価75円で販売された(No170)。このように、昭和21年度には本学における英語教育の普及とその支援が行なわれたのである。そのほかにも、10月15日には藤井新一講師による「新憲法ニ関スル記念講演」(No160)、11月21日には学友会主催の四大学弁論大会(No174、178)・金森国務大臣の講演(No175、176)などの教育活動が確認できる。

さらには、学生生活にも変化が見られるようになった。学生の活動に関して定めた揭示史料(No149)によると、①学生の集会はその都度学生課に届け出ること、②学生の揭示は学生課の承認を受けること、③学生の教室利用の際は所定の申請用紙を3日前に届け出ること、が定められている。これらの内容から、昭和21年度に入り学生数が増加したことがうかがえる。これに伴って、学友会の幹部が整備されるなど、学生の活動が活発になっていく様子がうかがえる。

○昭和22年

昭和22年は、52点の「揭示史料」が確認できる。同年4月20日には第1回参議院選挙、4月25日には第23回衆議院総選挙が行なわれ、駒澤大学同窓会会員から衆議院に1名、参議院に2名、地方議会に3名当選している(No190、191)。この時期に予科に入学した葛西泰雄氏は、「例年のごとく四月に始業式が挙行されても、何等かの理由で授業開始は五月、そして六月の初旬からぼつぼつ帰省する学生が目立ち、中旬から月末にかけて閑古鳥の鳴くような静けさであった。偏に食糧不足のためである」と、当時の駒澤大学の現状を述べている¹⁴⁾。

6月10日、学長立花俊道の呼びかけで教員総会が開催された。内容は「新制大学其他の件」に関してだった(No203)。その後の動向は不明であるが、10月15日の開校記念式典後、16日から19日までを臨時休暇とし、22日に立花俊道学長と石附賢道学監が「一身上ノ都合」により辞任、学長に岡田宜法、学監に児玉達童・古坂明詮が就任した(No218、221)。

『百二十年史』によると、昭和22年11月、「新学制対策委員会を発足し、数度にわたる審議を経て、同委員会を常任委員会に改称し、新制大学への切り替えや、その後の発展充実に務めました」とある。詳細は分からないが、戦後の混乱期を支えた立花俊道は、新学制対策委員会の発足を前にして一線を退いたのである。このとき、立花俊道は70歳、岡田宜法は65歳だった。

ところで、立花俊道を挟んで前後で学長に就任した山上曹源と岡田宜法は、共に忽滑谷快天の弟子であり、山内舜雄氏は「快天の二高足」と表現している。大正時代に大学昇格を主導した忽滑谷快天の弟子2人が、終戦直後の駒澤大学を指揮し、新制大学昇格を支えたのは何かの運命であろうか。

また、学生の災害支援に関する「揭示史料」も確認できる。同年9月15日に日本列島に上陸したカスリーン台風によって、利根川や荒川が氾濫し、東京都の西側に大きな被害をもたらした。本学の学生は、10月に水害地消毒救護を行ない、東京都知事安井誠一郎から感謝状を貰っている(No215、240)。

○昭和23年

昭和23年は、45点の「揭示史料」が確認できる。4月10日に入学宣誓式が行なわれ (No244)、13日に教室割が発表された (No246)。これをまとめると、以下の表の通りとなる。

	一年	二年	三年
新制高等学校	1～4番教室		
予科	22番教室、23番教室 24番教室	9番教室 (1組) 10番教室 (2組)	11番教室 (1組) 12番教室 (2組)
歴史科	28番教室	7番教室	6番教室
地理科	29番教室	8番教室	27番教室
国語科	18番教室	17番教室	16番教室
仏教科	21番教室	20番教室	19番教室

この表で注目したいのは、「新制高等学校」である。『百二十年史』によると、「新制大学認可に先立ち、昭和23年3月、本学の駒澤大学高等学校が認可され、現在の禅研究館の場所にあった木造2階建ての建物が校舎となりました」とある。「新制高等学校」だけで4教室使用していることから、多くの高校生を入学させたのであろう。また、昭和21年の教室割 (No137) よりも多くの教室を使用しており、多くの学生が在籍していたことがわかる。

他にも、様々な変化が見られる。4月29日には「天長節」のため休講とし、5月1日には祝聖の後に校歌の練習を行なっている。これは、今までの「揭示史料」には見られない点である。また、大学は、5月2日から「夏時間 (サマータイム)」を導入し、7時から授業を開始することを通達し、授業時間を変更した (No249、253)。さらに、第65周年開校記念式には、シカゴ大学教授の山内繁雄氏が「日本再建への道」、GHQ民情教育部大学課副課長のデ・タイパーが「アメリカの学生生活」の演目で講演している (No274、275)。このように、岡田直法学長は新制大学認可に向けて、教育活動の整備に尽力していた。

(3) 駒澤大学の勤労奉仕について

駒澤大学の学生による勤労奉仕の実態について、『八十年史』では、勤労作業は軍事施設の建設や食糧増産の作業、航空機等の生産その他軍需工場に赴いて、休暇を利用して短期間行なわれるとし、陸軍衛生材料廠 (昭和16年9月10日～16日) や陸軍獣医資材本廠 (立川、昭和17年7月8日～12日) を挙げている。さらに、『百二十年史』では、「同 (昭和) 十九年に北辰電機製作所・古川鑄造株式会社、翌二〇年中西航空株式会社にて勤労作業を行なっている」としている。

しかし、筆者が行なった調査によると、学外の軍需工場・施設等へ学生が派遣された事例は他にも確認できる。次の表をご覧ください。

年代	期間	作業場所・会社名	現住所	対象学科・人数	呼称	目録
昭和18年 (1943)	6.15～30	東京第二陸軍造兵廠多摩製造所	東京都 稲城市	高等師範科、学部 (東洋・仏教)、 専門部仏教科、予科	奉仕	No12
	8.26～	不明	不明	学部1・2年	奉仕	No54
	10.1～10	株式会社宮地鉄工所	東京都 江東区	専門部歴史地理科1年 (55名)	奉仕	
	10.11～20	那須アルミニウム製造所	東京都 葛飾区	専門部仏教1年 (20名)、専門 部国語漢文1年 (42名)	奉仕	
	10.21～31	三菱製鋼株式会社	東京都 江東区	学部 (147名、初年度が少数の ため実施せず)、専門部仏教科 (18名)	奉仕	
昭和19年 (1944)	3.20～31	不明	不明	学部、専門部、予科	作業	No71
	5.1～7.31	北辰電気製作所	東京都 大田区	歴史地理科3年、専門部仏教科 2年	奉仕	No78 ～80
	9.15～11.7	古河鑄造株式会社	川崎市 幸区	学部	奉仕	No85 ～87
昭和20年 (1945)	1.25～ (緊急動員規定ニ拠ル)	中西航空工業株式会社	東京都 三鷹市	学部各学年全員	動員	No97

この表は、本展示開催における史料調査で判明した勤労奉仕先の一覧表である。それぞれの出典は、「揭示録」と「報国団関係綴」¹⁶⁾である。この表を見ていただくと、『百二十年史』で挙げられている以外にも、多くの軍需工場に派遣されていることがわかる。

最初に確認できる勤労奉仕は、昭和18年6月15日～30日の東京第二陸軍造兵廠多摩製造所である(No.12)。これは、4回に分けて行なわれたようで、第一回(15日～18日)は高等師範科二年と予科一年、第二回(20日～22日)は学部二年と学部仏教一年・予科三年、第三回(23日～25日)は学部東洋科・人文科一年と予科二年、第四回(26日～30日)は専門部仏教科二年と専門部一年が、それぞれ派遣されている。

次に、派遣された人数が正確に記載されている昭和18年10月の勤労奉仕の詳細を確認してみる。これをよく伝える文書部の「報国団関係綴」の記載からまとめる。

昭和18年10月1日から31日の間、株式会社宮地鐵工所・株式会社那須アルミニウム製造所・三菱鉄鋼株式会社での勤労奉仕が計画されている。株式会社宮地鐵工所は、城東区(現江東区)南砂町に所在し、50名の所要員数で55人の派遣が予定されていた。株式会社那須アルミニウム製造所は、葛飾区平井中町に所在し、60名の所要員数で62名の派遣が予定されていた。三菱鉄鋼株式会社は城東区(現江東区)大島町に所在し、150名の所要員数で165名の派遣が予定されていた。出勤編成は、10月1日から10日までを専門部各科一・二年、11日から20日までを予科一・二年、21日から31日までを学部全員で担当し、三交代制で行う予定であった。作業時間は午前8時半から午後4時半までで、弁当は各自持参となっている。しかし、実際には、学部初年度の人員が不足していたため、学部を次回の勤労奉仕にまわし、専門部・予科の二交代制で行うことになった。

まさにこの昭和18年に学部一年だった森田孝観氏は、「十八年学徒総出陣。上級生のほとんど全員と同級生の大部分は神宮外苑である学徒出陣壮行会の分列行進を行なってペンを銃にかえて征った。(中略)、残された学部生は私のように早生まれで適齢に達しなかった数名と丙種以下の虚弱者や、戦傷帰還兵、晩学学生等合わせて二十名をこえなかったと思う。」と記している¹⁷⁾。「十八年学徒総出陣」とは、同年10月の在学徴集延期臨時特例のため、学生の徴兵延期が廃止されたためである。この記載から、本学からも多くの学生が出征したことがうかがえる。そして、大学に残った学生が虚弱者や戦傷者などで人数が少なかったため、上記のような勤労奉仕計画の変更となったのである。

また、上記以外にも勤労奉仕を行っていたことが、見理文周氏の手記によって確認できる¹⁸⁾。これによると、「勤労奉仕したのは、赤羽の火薬廠・亀井戸の三菱重工・用賀の衛生材料廠・南多摩の兵器廠・成増の飛行場など、数え切れない。」とある。「南多摩の兵器廠」とは、東京第二陸軍造兵廠多摩製造所のことであろうが、それ以外は表には無い。したがって、この表以外にも勤労奉仕が行なわれていたといえる。この点は、今後の調査・研究に任せたい。

ところで、軍需工場へ学生を従事させることを、「勤労奉仕」・「勤労働員」・「勤労作業」など様々な呼称を用いているが、これらの呼称の違いに差異はあるのだろうか。

『日本国語大辞典』の記述によると、「勤労奉仕」は「社会の利益のために、無償で公共の作業に従事すること。」とあり、「勤労働員」は「戦時目的のために、労働に従事する者を組織すること。また、その労働。」とある。『八十年史』『百二十年史』等で使用される「勤労作業」は『日本国語大辞典』には記載がないが、昭和13年6月9日付文部次官通牒¹⁹⁾に、「集団勤労作業ハ実践的精神教育ノ一方法」と記載されている。

それでは、「揭示史料」上ではどのように表現されているのであろうか。確認してみると、基本的には「勤労奉仕」を使っており、昭和19年に「勤労作業」、昭和20年に「勤労働員」がそれぞれ一回ずつ使われている。そこで、「勤労作業」・「勤労働員」の呼称が使用されている「揭示史料」を確認しよう。

【史料5】(No.71)

告

本学学期試験終了後ハ、全学教練並ニ勤労作業実施ノ予定ニツキ左ノ如ク心得ベン

記

一、期間

予科、専門部 自 三月二十日 (月)

至 同 卅一日 (金)

学部 自 三月廿六日 (日)

至 同 卅一日 (金)

(以上イヅレモ日曜、祭日ヲ含ム)

二、場所其ノ他具体的事項ハ追而告示ス

三、全期間ニ於テ「五分之一」以上欠席シタルモノハ、命退学ニ処セラルベキニツキ、帰省其ノ他各自ノ用事ハ、予メ整理シ置クベシ

以上

昭和十九年三月二日

駒澤大学

【史料6】(No.97)

告

学部勤労働員ニ関スル諸注意左ノ如シ

記

一、出勤先 中西航空工業株式会社

二、期間 自 昭和二十年一月二十五日

至 緊急動員規定ニ拠ル

三、動員範囲 学部各学年全員

但シ、虚弱者ヲ除ク。虚弱者ハ学校ニ於テ、授業並ニ軽度ノ作業ヲ課ス、

四、生活 出勤学生ハ全員会社ノ寮ニ入寮スルモノトス。入寮ニ関スル心得左ノ如シ

(中略)

昭和廿年一月二十一日

駒澤大学

【史料5】は「勤勞作業」、【史料6】は「勤労働員」について記した揭示史料である。

【史料5】の下線部を見てみると、「全学教練並ニ勤勞作業実施ノ予定」とある。さらに、「「五分之一」以上欠席シタルモノハ、^(ママ)命退学ニ処セラルベキ」とも記載されており、授業の一環として、「勤勞作業」が行なわれていることがわかる。これは、「勤勞作業」について記した、昭和13年6月9日付文部次官通牒の「集団勤勞作業ハ実践的精神教育ノ一方法」を実践しているのである。

【史料6】の下線部を見てみると、「緊急動員規定ニ拠ル」と記載されている。他にも、全学生の入寮が義務付けられており、分担して勤務する「勤勞奉仕」とは大きく異なる。これらの性質を持つ点で、「勤勞奉仕」とは異なるという認識から、「勤労働員」という表現をしているのであろう。また、昭和20年1月13日の揭示(No.92)には「勤労働員ニ関スル指示」という文言が、同年1月16日には「勤労働員ノ編成」に関する揭示(No.94)がされている。つまり、大学側は昭和20年以降になって、「勤労働員」という表現を使い始めているのである。

以上のことから、本学の揭示史料においては、「実践的精神教育」の一環として勤勞が行なわれる場合は「作業」、「緊急動員規定」に基づいて勤勞が行なわれる場合は「動員」、これら勤勞全体を包括するものを「奉仕」と使い分けがされているのである。

(4) 昭和20年における戦時体制について

昭和20年になると、戦火は本土にまで及んでいた。政府は4月1日から一年間の授業停止と、学生の動員を定めた決戦教育措置要綱を閣議決定した(昭和20年3月18日)²⁰⁾。これによる、本学の動向を確認してみよう。

当時の戦況の変化を表している、次の史料をご覧ください。

【史料7】(No.96)

告

撃墜(不時着)敵機及搭乗員ニ対スル措置ニ関シ、当局ヨリ通牒アリタルニ付、左記ノ如ク心得ベシ、

記

- 一、速カニ憲兵隊、若ハ在郷軍人会、防衛隊等ニ通報シ、其ノ活動ニ協力スルコト、
- 一、前項通報ニ時間ヲ要スル場合ハ、最寄警察署、若ハ警防団ニ通報スルコト、
- 一、抵抗意志ナキ搭乗員ハ、速カニ捕獲シテハ、真ニ已ムヲ得ザル場合ノ外ハ、竹槍猟銃等ヲ以テ威嚇シ、逃亡抗争ノ防止ニ努ムルコト、
- 一、有能ナル情報源ヲ、烏有ニ帰セシメザル如ク措置スルコト、
- 一、軍又ハ官憲ノ許可ナキ者ノ写真撮影ヲ禁ジ、流言ヲ防止スルニ努ムルコト、
- 一、携行爆弾等ノ爆発ノタメ、危険ヲ伴フコトアルヲ以テ、監視位置ノ選定ニハ特ニ注意スルコト、

以上

【史料7】は、年月日が記されていないため詳細は不明であるが、前後の「揭示史料」の年次から昭和20年、東京への空襲が激化した2月ごろと考えられる。

内容としては、撃墜(不時着)した戦闘機の搭乗員措置に関するものである。内容を大別すると、①搭乗員を見つけ次第、憲兵隊・在郷軍人会・防衛隊への通報・協力、または警察署・警防団への連絡、②搭乗員の捕獲・逃亡の阻止、③情報の流出阻止、④監視位置の注意、となる。

【史料7】の内容から、政府は情報源としての搭乗員の価値を重視し、抵抗しない搭乗員に対する民衆の非人道的行為を、未然に制約していることがわかる。「真ニ已ムヲ得ザル場合ノ外」は、基本的には民衆が武器を構えて搭乗員に対峙することは、政府は認めていないのである。このような通牒を政府が発給した背景には、東京に対して戦闘機の往来が増加していたことや、撃墜戦闘機の搭乗員が、民衆による非人道的行為により、情報源を失う例があったと推測できる。搭乗員の捕獲後も、写真撮影の禁止や流言の防止に努めることで、民衆の暴動を未然に防ぎ、情報源となる搭乗員を保護する狙いがあったと思われる。

このように、戦闘が激化する中で、大学側の学生に対する認識にも変化が生じた。次の史料をご覧ください。

【史料8】(No.111)

告

明六月八日(金)午前八時ヨリ、大講堂ニ於テ、大詔棒読式ヲ行フ、学生一同必ず出席スベシ、

六月七日

駒澤大学

【史料9】(No.119)

告

八月一日(水)七時十分ヨリ、大講堂ニ於テ、祝聖ヲ厳行ス、学徒一同必ず出席スベシ、

七月三十一日

【史料10】(No.120)

告

八月八日(水)午前七時十分ヨリ、大講堂ニ於テ、大詔棒読式ヲ行フニ付、学徒一同必ず出席スベシ、

八月七日

駒澤大学

【史料8】、【史料9】、【史料10】は、いずれも昭和20年に比定される「揭示史料」である。いずれも、「告」であることから、学生に向けて揭示されていたことが分かる。

学生の呼称に注目してみたい。【史料8】では、「学生一同」と呼称されている。しかし、【史料9】、【史料10】では、「学徒一同」と呼称されているのである。この呼称の変化には、駒澤大学学徒隊の結成が関連していると考えられる。

それでは、駒澤大学学徒隊の編制はどのようなものだったのであろうか。6月21日の謹告(No.116)によると、隊長を山上曹源学長が務め、大隊長に西澤頼応学監が就き、以下教授陣によって中隊長・小隊長が占められている。さらにこの下に、学生による「学徒隊」が組織されていたようである。しかし、この駒澤大学学徒隊は、7月27日に「駒澤大学戦闘戦隊」と改められ、教授陣が隊長を務める各区隊に、学部(大半は中西航空工業株式会社に勤労働員)・専門部・予科学生ら「学徒隊」が、学年ごとに編成されていることがわかる(No.101)。

したがって、駒澤大学学徒隊結成(6月21日)以前に発給された【史料8】では、大学側が「学生」と認識していたものが、学徒隊の結成により【史料9】、【史料10】のように「学徒」と認識されるようになったのである。

おわりに

本稿は、本学特集展の開催経緯と、その経過を簡単にではあるがまとめさせていただいた。そして、展示を開催する上で行なった「揭示録」等の史料調査報告もさせていただいた。

初夏のころであったらうか、第2回全国大学史展へ「揭示録」を出展するため、梱包している場面に遭遇した時、「揭示録」をメインに据える展示構成を企画した。その後、「揭示史料」をひとつひとつ撮影し、目録を作成する作業には多くの時間を要した。また、他の関連史料も調査したため、展示準備をする期間が限られてしまった²¹⁾。

展示を開始してから、齊藤研也氏の「第2回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」に期待すること—第94回研究会に参加して」を拝読した²²⁾。この中で、齊藤氏は、「戦争が学生にもたらした「変化」だけではなく、学生の正課や課外活動、そしてさまざまな日常といった=学生として「変わらないもの」を紹介すること」が重要であるとしている。この視点を本展示に重ねてみると、「変化」に比重が傾いており、時代を多面から捉える視点に欠けていたと感じる。これは、今後の戦時期に関する大学史展示を行なう際には、意識的に組み立てる必要があるだろう。

最後に、史料調査や他大学の戦争関連展示をまとめる中で感じた、駒澤大学と大学史をめぐる現状について述べたい。駒澤大学では、各年史編纂の過程で多くの学内文書の調査・研究がすすめられ、大学史に関する成果を多く残してきた。しかし、その年史編纂過程で取り扱った学内文書が、各年史編纂室の解体・移管に伴って現在どこに所在しているか判然としないものもある。また、年史編纂の時期にのみ、大学史を調査・研究するのではなく、恒常的・継続的に大学史史料の収集と、調査・研究を行なっていく必要があるだろう。

他大学の事例を参考にして、プロジェクトや研究会、長期計画を設定し、様々な学部・研究科の協力体制を構築し、大学史研究を行なう環境整備が必要となるだろう。このような取り組みによって自校教育の下支えをし、大学のブランド力を高めていくきっかけとなるのではなかろうか。

註

- 1) 「学生たちの戦前・戦中・戦後」展示実行委員会編『第2回全国大学史展 学生たちの戦前・戦中・戦後』(全国大学史資料協議会東日本支部会、2015年)。各大学の展示は、例えば神奈川大学(史料編纂室)「学問と白球と—ある横浜専門学校生の1940-1942」、中央大学(大学史資料課)「戦後70年—あらためて戦争と中央大学を考える—」、専修大学(総務部大学史資料課)「専修大学と学徒出陣—パンを銃にかえて—」、立教大学(立教学院展示館)「戦時下、立教の日々 変わりゆく「自由の学府」の中で」、慶應義塾大学(福澤研究センター)「慶應義塾の昭和二十年」、早稲田大学(大学史資料センター)「学徒たちの戦場—戦後70年—」等。
- 2) 望月雅士「戦没した兄・高木多嘉雄を語る—新谷照氏・吉川美氏に聞く—」(『早稲田大学史記要』45、早稲田大学大学史資料センター、2014年)。柴崎信緒・望月雅士「[[聞き取り記録] 私の戦争体験」(『早稲田大学史記要』46、早稲田大学大学史資料センター、2015年)。
- 3) 「福沢研究センター通信」19~23号(福沢研究センター、2013~2015年)。
- 4) 法政大学史委員会・法政大学史センター『学び舎から戦場へ—学徒出陣70年 法政大学の取り組み— 記念展示会・公開シンポジウム 図録』(法政大学、2015年)。シンポジウムについては、法政大学学徒出陣調査中間報告会「戦後70年 法政大学と出陣学徒—記憶と記録」(2015年11月23日開催)。
- 5) 「中央大学学員時報490号」(中央大学学員会本部事務局、2015年)。菅原彬州著「戦後70年記念講演会「戦中・戦後の中央大学」」(中央大学「戦争と中央大学プロジェクト、2015年」)。『戦争と中央大学プロジェクト 展示 戦後70年—あらためて戦争と中央大学を考える—』(中央大学広報室大学史資料課、2015年)。
- 6) 『戦争と明治大学—明治大学学徒出陣・学徒勤労働員—』(明治大学史資料センター、2010年)。
- 7) 「日本大学大学史編纂課だより」(日本大学広報部大学史編纂課、2015年)。
- 8) 研究成果は枚挙に暇がないが、『立教学院史研究』には創刊号以降、多くの論文・研究ノート・座談会・インタビューが掲載されている。
- 9) 研究者代表：前田一男『科学研究費補助金基礎研究(B)(2)研究成果報告書「国際環境の中のミッションスクールと戦争—立教大学を事例として—」(2005年)。他にも、これまでの研究成果を集約した論文集として、老川慶喜・前田一男編著『ミッションスクールと戦争—立教学院のディレンマ—』(東信堂、2008年)を出版している。
- 10) 『駒澤大学百二十年 過去からいま そして未来へ』(駒澤大学開校百二十年史編纂委員会、2002年)。
- 11) 「特設防護団関係係・防護団編成組織役員名簿」(簿冊No50)より。この史料は「揭示録」同様、百二十年史編纂事業の際に総務部が保管していた史料群の中のひとつである。細目録は完成している。
- 12) 『駒澤大学八十年史』(駒澤大学八十年史編纂委員会、1962年)。
- 13) 前掲註(12)。
- 14) 葛西泰雄「敗戦の爪あと深き予科時代」(所収、山内瞬雄編『駒沢に竹波打ちて—戦中から戦後へのあゆみ—』現代駒沢精神史刊行会、1962年)。
- 15) 山内舜雄著『統道元禪の近代化過程—忽滑谷快天の禪学とその思想—駒澤大学建学史>—』(慶友社、2009年)
- 16) この史料は「揭示録」同様、百二十年史編纂事業の際に総務部が保管していた史料群の中のひとつである。細目録は完成している(簿冊No68)。
- 17) 森田孝観「戦争末期の学園生活—荒廃と挫折の中から—」
- 18) 見理文周「戦中派の彷徨—酔いと飢えの青春—」(所収、山内瞬雄編『駒沢に竹波打ちて—戦中から戦後へのあゆみ—』現代駒沢精神史刊行会、1962年)。
- 19) 昭和13年6月9日発普85号(福間敏矩『集成 学徒勤労働員』ジャパン総研、2002年)。
- 20) 宮原誠一ほか編『資料日本現代教育史4』(三省堂、1974年)。
- 21) 戦時中の駒澤大学に関する史料は、他に「文部省其他公文書綴」(簿冊No47)、「文部省通達関係綴」(簿冊No48)、「昭和二十年度官公署関係書類」(簿冊No49)、「特設防護団関係係・防護団編成組織役員名簿」(簿冊No50)、「特設防護団関係綴」(簿冊No51)、「特別勤務簿」(簿冊No67)、「報国団関係綴」(簿冊No68)がある。いずれも細目録化している。

- 22) 齊藤研也「第2回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」に期待すること—第94回研究会に参加して」(所収、國學院大學 校史・学術資産研究センター編「全国大学史資料協議会東日本部会会報 大学アーカイブズ」53号、2015年)。

(なかむらりょうすけ 駒澤大学大学院人文科学研究科歴史学専攻博士前期課程修了)